『比較日本文化学研究』第10号（2017）

論　文

「音」から「声」へ

――村田沙耶香の『コンビニ人間』を読む――

呂　衛清
華中師範大学副教授・広島大学大学院文学研究科博士課程後期
安部智子
華中師範大学外国語学院日本語学科講師（外籍教師）

From Sound to Voice: Understanding Sayaka Murata's Novel *Convenience Store Woman*

LU Weiquing
ABE Tomoko

Abstract: In Sayaka Murata's novel *Convenience Store Woman*, the heroine, Keiko Furukura, is a woman chained by the three shackles of being a virgin, unmarried and a part-time worker. To Furukura, the convenience store is a holy place that enables her function as a "normal part of society". There are various kinds of sounds in the store such as music. However, her encounter with Shiraha causes discord and her belief in the convenience store is shaken. Led by a "heavenly voice" in the convenience store, her conscience is awakened just as she quits the job and is about to surrender to society. She turns down a proposal from Shiraha and becomes a convenience store woman in a true sense. This novel expresses the author's reflection on rebellion against modern society and the concern of humanity with a sense of humor.
Keywords: Sayaka Murata, *Convenience Store Woman,* Sound, Voice

0、はじめに

『コンビニ人間』は村田沙耶香（1979 ― ）の小説で、第155回芥川賞受賞作品である。2016年7月に発行され、同年11月14日現在で発行部数は50万部に達した[1]。著者自身が数々の賞を受賞した作家でありながら、現役コンビニアルバイトであるという点も注目された。選考委員の一人である村上龍に、

「この十年、現代をここまで描いた受賞作は無い[2]」と言わしめた作品でもある。

『コンビニ人間』の主人公古倉恵子は36歳、独身。コンビニ店員である。大学一年からアルバイトを始め、同じコンビニで18年間勤続しているが、社員ではなく飽くまでアルバイトという身分のままである。この年齢で未だアルバイト、幼少時代から友達もおらず、今の交友関係も広くない。また、異性との交際経験もなく、処女のままでいるということからみても、古倉は社会少数派であり、世間における一種の異物と位置付けることができる。

真意が伝わらず、周囲から「少し奇妙がられる子」(p.7)として育ち、両親が自分について「どうすれば『治る』のかしらね」(p.13)と相談しているのを耳にしてしまい、幼少時代から「何かを修正しなければならない」(p.13)と思っていた。その古倉はアルバイトの初日、客に感謝され、社員からもその対応を評価される。そこで「今、自分が生まれた」(p.20)と感じ、コンビニでの仕事は自身を「世界の部品」(p.20)、「世界の正常な部品」(p.20)、「世界の歯車」(p.22)としてくれるものであると思う。古倉にとって、コンビニは自身を「正常化」(p.58)してくれる場所として、重要性を持って受け入れられた。さらにそこでの人間関係は、「上手に「人間」ができている」(p.29)と感じさせ、安堵させてくれる。やっと求めていた居場所を見つけ、コンビニの「正常化」作用を実感した古倉は、徐々にコンビニに依存するようになり、神聖視していく。コンビニでの仕事を通して自身が変化したと信じる古倉は、私生活の面でも同窓会で再会した同級生と会うようになり、一見充実した生活を送っていた。しかし、コンビニでの充実感は「完璧なマニュアルがあって、「店員」になること」ができるからであり、「マニュアルの外ではどうすれば普通の人間になれるのか、やはりさっぱりわからないまま」(p.21)なのである。その上、友人たちはかつてと同じように、自分を「異物」(p.58)と見做しているのだと気づき、「排除」(p.58)されるべき存在なのだと思う。アルバイトを応援してくれていたはずの妹からも、「コンビニを始めてからますますおかしかった」(p.122)と言われ、これまでのコンビニ勤務に疑問を抱く。「正常化」される場所としてのコンビニに対し、ついに古倉の確固たるゆるぎない信頼が揺らいだのである。

こうした状況と実態を掴んだ背景には、新入りの店員白羽との出会いと、同居がある。白羽は男性であり、これまで異性との交際経験すらなかった古

倉にとって、この同居は自身を取り巻く周囲の人々との関係性に大きな影響を及ぼす。また、白羽の主張や同居後の周囲の人々の反応をみるなかで、コンビニにおいて自身を「正常化」しようとすることは実は間違いで、世間を納得させるべく男と女の役割を果たすことこそが正しいのではないかと認識を改めた古倉は、ついに18年勤めたコンビニを辞めることになる。

白羽との共同生活の中で、認識を改める過程と一旦コンビニを離れた期間を経ながらも、やっとこぎつけた就職面接を辞退してまで再びコンビニに戻ろうと決意する古倉であるが、その心理状況とは一体どんなものなのか。古倉にとってのコンビニと、それ以外の環境とを比較しつつ論じたい。また、古倉によるコンビニの宗教視と神聖視、コンビニの「音」と「声」は古倉のコンビニという場の認識と密接に関係している。それらはどういった意味を持ち、古倉の中でどう変化していくのかなどを分析したい。本稿では古倉のそうした心理状況の変化を、鍵となる白羽を中心に述べていく。

1、コンビニの宗教視

古倉はコンビニを、「世界の部品」、「世界の正常な部品」、「世界の歯車」としてくれた場所として、安心感を見出し、自身の居場所であると信じている。何より、自分が「生まれた」場所がコンビニである。初めて受けた感謝と評価によって、古倉は救われたといっても言い過ぎではないだろう。そうして次第にコンビニに依存するようになる。依存と位置付けるところには、古倉が「夢の中でもコンビニのレジを打っていることがよくある」(p.22)、「「いらっしゃいませ！」という自分の声で夜中に起きたこともある」(p.22)と述べるほか、私生活で居心地の悪さを感じるたび、コンビニに行きたいと思ったり、非番の日でもコンビニに向かうことなどによる。自身を「正常化」してくれた場所として信頼するあまり、コンビニに依存し、さらにはコンビニに向かって祈るなど、信仰する対象にまでになる。新人アルバイト、白羽と顔を合わせた日、朝礼で接客用語の唱和をしている様子に対し白羽が「……なんか、宗教みたいっすね」(p.46)と言い、それに対し「そうですよ」(p.46)と心の中で反射的に答えるが、白羽の場合は無条件に言葉を唱える様子を揶揄するものであるのに対し、古倉の認識はそれと異なる。以下の引用からも、古倉がコンビニを神聖視していることが分かる。

外から人が入ってくるチャイム音が、教会の鐘の音に聞こえる。ドアをあければ、光の箱が私を待っている。いつも回転し続ける、ゆるぎない正常な世界。私は、この光に満ちた箱の中の世界を信じている。(p.31)

古倉が勤務するコンビニを発見したのはオープン前のことで、そのときは「透明の水槽のよう」(p.14) と思ったが、ここでは、「光の箱」「光に満ちた箱の中の世界」と形容している。つまり、自分を迎える明るい場所であると同時に、独立した一つの「世界」であると見做している。これは何より、コンビニが正常な場所であり、外から隔離された別世界であることを示している。ドアを開ければ、つまりは出勤すればその「ゆるぎない正常な世界」に入ることができる。外部によって侵されない「正常な世界」は、自分を「正常化」できる力を持つ。古倉にとって信じ、崇めるに値する場所である。

「いやいや。古倉さんが謝ることじゃないから。古倉さん、最近特に声かけがんばってくれてるねー、カメラ見てても、お、すごい頑張ってるなって感じ。えらいよー、古倉さんは毎日勤務なのに手を抜かないからねー！」
８人目の店長は、私が「コンビニ」へ向かっていつでも祈り続けていることを、その場にいないときもちゃんと見てくれている。(p.61)

「ゆるぎない正常な世界」はまた、古倉が「信じている」と同時に、祈りの対象でもあることが示されている。ここは、店長が白羽の勤務態度について言及する場面である。白羽は勤務中、レジの中で携帯を弄っていたところを店長に発見されたのである。同じ時間帯に勤務していた古倉はそれに気づかなかったことを詫びる。そこで店長は古倉の勤務態度の一例を挙げ、単にフォローをしたにすぎない。

店長が「頑張ってくれてる」と評価するこの「声かけ」については、「いらっしゃいませ！本日、オープニングセール中です！いかがでしょうか！」(p.17) がそれであると示され、さらに「今日は新商品のマンゴーチョコレートパンがおすすめ商品です。皆で声かけしていきましょー」(p.30) とあるところからみると、客に呼びかけ、注意を喚起する言葉であることが分かる。さらに、この商品は店長が多めに発注したもので、店員たちは何とか売り切る必要があった。コンビニを祈りの対象として、信仰の対象として捉える古倉にとって、「声かけ」は単に客に向かって言葉をかけるといったものではない。客をコンビニのためになるように、コンビニの利益となるように行動させるための働きかけ、言うなれば不特定多数の者たちへの号令であるのだ。

自分を変えてくれた大切な場所を失うわけにはいかない。コンビニの安泰のため、「声かけ」は重要なのである。

かつ、古倉のその祈りは「いつでも」「続けている」ものである。古倉はコンビニにいないときでも、常にコンビニのことを考えている。非番の日でも、コンビニの状態に思いを巡らせ、寝る前にはコンビニの「音」を思い浮かべると安心して眠りにつくことができる。古倉の生活スタイルはコンビニ勤務に合わせたもので、身だしなみを整えることは自分のためではなく、飽くまでお客様のためである。そして勤務に備えて体調を整えることなど、生活の中心には常にコンビニがある。「毎日勤務なのに手を抜かない」という店長の言葉は、陰の努力が評価されたようで、嬉しい言葉であったに違いない。

長年願った「正常化」を遂げさせてくれたコンビニは、まさに古倉にとって救いであり、信仰すべき対象となった。世間とうまくやって行けなかった古倉が、マニュアル通りに働いたことで初めて評価された場所。必要とされていると思えた場所、それがコンビニである。

ところで、祈りというのは通常、対象が神格化されていなければできない。また、何かを実現させたいとき、良いことが起こるよう願うことが祈りであるとすれば、古倉はほかならぬ自身の「正常化」を祈っているのである。古倉は自身を正常化させてくれたコンビニを崇め、のみならずその恩を忘れない。このようにコンビニを信仰していたが、白羽と出会い、コンビニもその外も変わらないと気づくことでこの信仰も崩壊する。

2、コンビニの外の世界

2．1 古倉の「世界」の認識

古倉が一旦辞めたコンビニに再び戻る心理状況を考えるには、そもそも古倉が「コンビニ」をどう捉えていたかを把握することが重要であるが、より明確に古倉にとってのコンビニの価値を把握するためには、比較対象としてのコンビニの外における生活をみる必要がある。

小学校時代、真意が伝わらず、問題行動を起こす度に母親が呼び出され、悲しむ姿を見た。しかし「何か悪いことをしてしまったらしいが、どうしてなのかは、わからなかった」（p.12）と、問題の根本を見極めることができず、両親を悲しませないため、「皆の真似をするか、誰かの指示に従うか、どちらかにして、自ら動くのは一切やめ」（p.12）ることに決める。おかげでなんと

か小、中、高、そして大学時代を乗り越えたが、36歳になった現在においても、交友関係、行動範囲は広いとはいえない。アルバイトは週に5日で、コンビニが過ごす時間の最も多い場所であるほか、同窓会で再会し、明るく声をかけてきた「ミホ」をはじめとした地元の友人たちに非番の金曜日に会うが、実家には顔を出さず、妹にたまに会う程度である。古倉のコンビニの外の世界とは、妹を主とした家族、同級生たちに限られる。また後に、そこにはアルバイトを解雇された白羽も加わるが、次章で扱うことにし、本章では扱わない。

なお、「世界」という言葉を用いるのには、既に述べたように、コンビニを「光に満ちた箱の中の世界」ということ、また、アルバイト初日、「初めて、世界の部品になることができた」と実感したこと、大学卒業後もそのままアルバイトを続けるという古倉を家族は責めることなく、「ほとんど世界と接点がなかった少し前の私に比べれば大変な成長だと、応援してくれた」(p.21)とあることによる。つまりコンビニとは、古倉がその一部分となれる世界であり、アルバイトを始める前はそうした「世界」ともほぼつながりがなかったことが示されている。さらに、地元の友人たちとの交流を「コンビニ以外の世界との唯一の接点」(p.31)と表現するところをみても、コンビニはコンビニという一つの世界として、それ以外の世界は一括されて別個の一世界という認識があるようである。ここで強調すべきは、より広く多岐にわたっているはずの外の世界を一括し、コンビニと対等に並べるということは、「コンビニ」という世界が古倉にとって一層の重要性を持っているということである。

なお、コンビニ勤務を通して繋がれるのは、「世間」でも「社会」でもなく、「世界」とするところに注目したい。人と人との関係が基礎となる世間や社会と違って、世界とは、たとえそこに人と人の関係がなくとも、ただ漠然と存在し得るものであるし、その中に属することもできる。同級生について、「就職か結婚という形でほとんどが社会と接続していき」(p.36)という表現があることと比べても、アルバイトはそこに含まれず、古倉の場合は飽くまで漠然たる「世界」と繋がりが持てるようにしてくれた場所、それがコンビニであると意識させられる。

コンビニで働くことで世界と接点を持てた古倉は、それ以前は世界にすら属していなかった。自主的に行動を起こさず、指示に従うことに徹していた

古倉は、自らの狭い世界に閉じこもり、たとえ漠然と存在する世界そのものにも、属していなかったのだろう。コンビニによって世界と繋がり、変わることが出来た古倉であったが、「完璧なマニュアルがあって、「店員」になること」ができるコンビニと、「マニュアルの外ではどうすれば普通の人間になれるのか、やはりさっぱりわからないまま」と言うように、その外には明らかに住みにくさがあることを自覚している。古倉にとって、「世界の部品」でいられるのはコンビニにおいてのみである。

2．2 友人たち

地元の友人たちとの交流は古倉にとって「コンビニ以外の世界との唯一の接点であり、同い年の「普通の三十代女性」と交流する貴重な機会」である。とはいえ、「明日もアルバイトなので億劫に思うときもある」（p.31）と、友人との語らいの場は進んで足を向ける楽しいものではなく、できうる限り世界との接点を持とうとする努力の一環であることがうかがえる。古倉が友人たちと会うのは主に「ミホ」の家である。ミホとは同窓会で再会しそれから度々会うようになったが、もともと友人関係があった訳ではなく、再会を契機に始まったものである。ミホからさらに地元の友人の輪が広がったが、ミホをはじめ、その他の友人の名前も全てカタカナ表記であることが注目される。コンビニ店員たちは役職で呼ばれる店長を除いて全て漢字の名前で現れるところと比較しても、両者の存在は、古倉にとって異なる意味合いを持つことがうかがえる。これは、他の友人同士が呼んでいる際の音のみを聞いて正しい漢字表記を知らないという可能性、また、古倉が正しい表記に対して関心がないこともうかがえる。さらに深読みすれば、古倉はミホの子供も甥っ子も、「野良猫のようなもので、少しの違いはあっても「赤ん坊」という種類の同じ動物にしか見えない」（p.54）のである。このことと合わせて考えると、地元の友人たちという一括りの存在の中で、便宜上呼び名は必要とするが、個々人を識別する上での他の情報は不必要と見做していると考えることも不可能ではないだろう。

コンビニ店員たちの癖やしゃべり方を細かく観察している一方で、友人たちに対しては「前からそうだったろうか、と思いだそうとするが、記憶が曖昧だ。前に会ったときの二人の小さな癖や仕草は、もうどこかへ流れ出て行ってしまったのかもしれないとも思う」（p.34）というところからみても、古

倉にとって観察、参考の対象であるといえない。コンビニ店員の泉さんのしゃべり方を真似、さらには服装を真似るためにロッカーの中の洋服まで盗み見ていることと比べても、友人らは古倉にとって影響力も重要性を持たないといえる。その上、友人たちとの付き合いとコンビニとを比べ、コンビニは「こんなに複雑ではない」（p.38）といい、語らいの場においても「早くコンビニに行きたいな」（p.38）と思うのである。さらには、ミホの家の帰りにコンビニが恋しくなり、非番の日にも拘わらずコンビニに向かう。

このように、友人たちとの交流を「貴重な機会」とはいっても、古倉が重要視する正常な人間たるに必要な教えはコンビニにのみあると思っているようである。コンビニの世界には依存がみられる一方で、友人たちのいる世界には執着をしない。重んじるべき世界がコンビニの世界であるなら、寧ろ友人たちとの交流は、コンビニでうまく人間としてやっていくための手段として捉えられているといっても言いすぎではないだろう。

古倉が友人らとの付き合いをコンビニほど重視しない傾向はここにも現れる。古倉はコンビニにおいては店員たちの反応を気にして行動する。例えば古倉には怒りという感情はほぼないが、「同じことで怒ると、店員の皆がうれしそうな顔をする」（p.29）と気づいて無理にでも怒ってみせること、さらにそのときの店員たちの顔を見て「今、上手に「人間」ができている」と安堵すること、アルバイト仲間の菅原さんに「私や泉さんに合わせて怒ってくれることはあるけど、基本的に自分から文句言ったりしない」（p.50）と言われ、「ぎくりと」して「慌てて表情を取り繕」（p.50）うところなどが挙げられる。これが友人たちとの付き合いの場では、ミホの旦那さんに続けざまに質問し気味悪がられても「純粋に聞いているだけなのに」（p.76）と思うだけで、さらに質問を重ねたため小さな声で「やべえ」（p.76）とつぶやかれる。そこで始めて古倉は「あ、私、異物になっている」（p.77）と「ぼんやり」（p.77）思うのだ。外の世界の人間に異物視されても、取り繕ったり、弁解する様子はなく、焦る様子すらない。要するに、古倉はコンビニの中ではうまくやっていくため、「上手に「人間」」ができるよう努力をするが、外の世界で、友人たちに対してはその努力をしているとはいえず、異物視されることすら受け止めている。古倉にはコンビニの世界では部品、歯車としてうまくやっているという自負がみられる一方、外の世界では未だ自信がなく、たとえ異物と見做されてもそれは十分に想定のなかにある。

また、古倉は友人同様、二つ年下の妹にも度々会いに行く。妹は幼い頃古倉と違って「「普通」の子ども」(p.12) で、今は結婚して実家を離れ、息子が一人いる。友人たちとの交流を「コンビニ以外の世界との唯一の接点」と表現するところからみて、古倉は、妹との付き合いを「接点」と呼ぶようなものとみていない。それは、妹は子どものころから古倉を「敬遠するわけでもなく、むしろ慕ってくれていた」(p.12) とするところによっている。妹は「甥っ子の顔ももっと見に来てよ」(p.53) となかなか家に遊びに来ない姉を詰り、未だアルバイト生活をしている理由を周囲に尋ねられた際の言い訳を古倉に代わって考える重要な役割を持つ。古倉も相談を持ちかける相手は両親ではなく妹を選んでおり、自分を慕ってくれ、助けてくれる妹は、変わることのない味方、頼りになる存在として見做しているようである。同じように度々会う友人たちとの交流は「コンビニ以外の世界との唯一の接点」と表現するところからみても、妹の存在は、敢えて「接点」という表現を使うような外の人間ではない。次項で述べるが、この古倉の認識は白羽との同居生活によって改められることになる。

3、コンビニの世界と外の世界にまたがる白羽

3．1 コンビニの認識

これまで述べてきたように、コンビニ勤務初日に客に感謝され、社員から褒められた古倉は「今、私が生まれた」と思い、自身が「世界の部品」「世界の正常な部品」になったと感じる。当初は「部品」であったが、「歯車」であるとさらに具体的に認識を改めたのは36歳になった現在である。

> 朝になれば、また私は店員になり、世界の歯車になれる。そのことだけが、私を正常な人間にしているのだ。(p.22)

歯車には対となる他の歯車が必要である。この「世界の歯車」は「店員」と同義であり、共に働く仲間の存在をもまた想起させるが、飽くまで古倉がコンビニ勤務を通して繋がれるのは、「社会」ではなく「世界」なのである。古倉を取り巻く環境の中で、唯一自身の存在を認識し、居場所であるはずのコンビニも、やはり漠然とした「世界」でしかない。そしてさらに、「店員」は「正常な人間」と同義に置かれる。たとえ漠然たる「世界」であっても、そこで部品の一つである「歯車」となって店員として働くことは、古倉にと

って「正常な人間」となることであるのだ。

> 指紋がないように磨かれたガラスの外では、忙しく歩く人たちの姿が見える。一日の始まり。世界が目を覚まし、世の中の歯車が回転し始める時間。その歯車の一つになって廻り続けている自分。私は世界の部品になって、この「朝」という時間の中で回転し続けている。(p.6)

古倉が世界の歯車となって回転を始める時間は朝である。そしてさらに、朝は「世界が目を覚ま」す時間なのである。実際には世界各地が朝を迎える時間はそれぞれに異なるはずであるが、古倉にとって、自分の勤務するコンビニが朝を迎える時間こそが、世界の朝なのである。こうした点でも、古倉にとって、コンビニ、さらに言うなら自身が勤務するコンビニこそが「世界」であり、古倉にとっての基準に据えられる。

3．2 コンビニ内部

古倉のアルバイト先であるコンビニには、「店長」、「泉さん」、「菅原さん」が主に登場する。古倉が「今の「私」を形成しているのはほとんど私のそばにいる人たち」(p.26) とし、そのすべてがコンビニで勤務する人々であるという点からみても、コンビニという場所が、古倉にとって非常に大きな影響力と重要性をもっていることが分かる。これはやはり、コンビニ＝「正常な世界」としての認識が、そこで働く人々を影響を受けるに相応しいと見做していることによるだろう。とりわけ、古倉より一つ年上の主婦である「泉さん」は、「正しい三十代女性の見本」(p.27) として、服装を真似る人物であり、かつ、しゃべり方は「泉さんと菅原さんをミックスさせたもの」(p.26) を意識して使っている。24 歳の菅原さんは別として、泉さんも地元の友人も、ともに三十代の女性であり、地元の友人たちに会うのは「同い年の「普通の三十代女性」と交流する貴重な機会」としながらも、そのしゃべり方や服装を真似ることをしない。泉さんの服装こそが「見本」であるのは、彼女がコンビニの世界の人間であり、バイトリーダーであり、他のバイトに影響を与えるほど一目置かれた存在であることとも無関係ではないだろう。やはり古倉にとってコンビニの世界こそがより身近であり、重要であることを示している。「正常な世界」で評価され、信頼されている人物。そういった点で泉さんは「正しい」のである。

服装を始めとしてコンビニで働く人々について古倉のもつ情報は非常に細かく、各人物をよく観察していることが分かる。店員たちの名前がカタカナである「外の世界」の友人たちに対し、役職で呼ばれる「店長」以外皆漢字表記であることは既に述べた通りだが、個性を持たないカタカナの表記と違って、個々人を明確に捉え、認識していこうとする姿勢がみられる。中でも「店長」については、一人目から現在の八人目の店長まで各人の特徴や辞職した理由までよく記憶している。そして歴代の店長からかけられた言葉もよく覚え、また実践している。しかし言うなれば、それはコンビニ内における彼らの様子やしゃべり方であり、プライベートな部分までは興味を示さない。

このように古倉がコンビニを重要視する背景には、何度も述べてきたとおりコンビニでは「世界の部品」「歯車」となってその「正常化」作用を実感したことにより、店員たちとの日々のやりとりの中で「上手に「人間」ができている」と安堵できる場所であることによる。「完璧なマニュアルがあって、「店員」になること」ができるコンビニと、「マニュアルの外ではどうすれば普通の人間になれるのか、やはりさっぱりわからないまま」といった部分からも分かるように、正常化されたと感じるのは他ならぬコンビニの「マニュアル」のおかげである。コンビニを離れれば明確なマニュアルはなく古倉は生きづらさを感じるのみである。そのため、「普通の人間」でいられることができるコンビニにますます強い思いを抱き、依存し、宗教のようにそこに救いを求めるのである。眠れない夜にコンビニのことを思って安心して眠りについたり、私生活で友人らにうまくなじめないと感じた際に「早くコンビニ行きたい」と思うことが依存を裏付ける。幼少時代から「何かを修正しなければならない」と感じていた自分が見つけた「正常な世界」、自分を「世界の歯車」にしてくれる世界、「光に満ちた箱の中の世界」、その世界こそがコンビニなのである。

なお、古倉は勤務先のコンビニ、スマイルマート日色町駅前店との出会いを鮮明に記憶している。当時はオープン前で、オフィス街に位置しているため、日曜の昼間周囲に「人の気配がどこにもなかった」(p.14)。ここで古倉は一旦「異世界に紛れ込んでしまったような感覚に襲われ」(p.14) る。「異世界」とは、コンビニの世界と外の世界の境界線にあり、二つを隔てるものである。自らがうまくなじめない外の世界と、「世界の部品」「世界の歯車」となり、「上手に「人間」ができている」と実感できるコンビニの世界との境界

線。出会いの時点では「異界」によって隔てられていたことで、コンビニの世界は一層周囲から独立した別世界として古倉に捉えられたのである。

3．3「コンビニの世界」と「外の世界」にまたがる「白羽」

古倉が生きるコンビニの世界と外の世界、その双方に存在しているのが「白羽」という男である。白羽は元々、古倉のアルバイト先であるコンビニに雇われた店員であるが、挨拶もろくにできず、基本的な仕事もこなせず、遅刻も多く、さらには禁止されている勤務中の携帯操作、気に入ったお客の個人情報を得ようとしたことから解雇された人物でもある。古倉は周囲から一番疑問を持たれる「何で結婚しないの？」（p.88）を解消するために、同じ境遇の白羽と同居し、形だけであっても婚姻届を出すことを提案する。

白羽と古倉の状況はそう大差ない。36歳で独身、交際経験も性体験もないコンビニアルバイトの古倉と、35歳ほどで同じく交際経験も性体験もなくコンビニアルバイトを始めたものの解雇された白羽である。この点での両者の相違といえば、その状況を特に変えようとせず、周囲に何か言われようと「特に守りたいものが自分にあるわけではないので」（p.83）という古倉に対し、やり方こそ特殊であれ「婚活」（p.65）のためにコンビニでのアルバイトを選んで相手を探す白羽は、状況を打開するため行動を起こしているという点である。これは、白羽が交際経験や性体験のなさ、就職をしていないことをあからさまに非難されてきたことによる。所謂少数派を受け入れない世間に憤る白羽は「いつからこんなに世界が間違っているのか調べたくて、歴史書を読んだ」（p.84）。そこで行きついた結論は「この世は現代社会の皮をかぶった縄文時代」（p.85）であった。白羽は常に現代と縄文時代が何も変わっていないことを力説し、男と女の役割が定められ、それに当てはまらない自分が不当な扱いを受けていると憤っている。これは白羽が自身の境遇を正当化するための詭弁のようであり、バイト仲間の菅原さんからも「頭おかしいですよ」（p.69）と全く理解されない。しかし古倉にとっては思い当たるところがあり、次第にこの理屈を受け入れていく。

古倉は当初、白羽が縄文時代について語るのを「今は現代ですよ！」（p.49）と受け流したが、結婚についての意識の相違でミホの旦那さんを質問責めにした後、「あ、私、異物になっている」（p.77）と感じたこともあり、「白羽さんの言うとおり、世界は縄文時代かもしれない」（p.87）とこぼす。そしてさ

らに、世界は「コンビニと同じ構造」(p.87) なのだと思う。古倉にとって、二つの世界、すなわち、「安堵」できるコンビニの世界と、「複雑」で住みにくいはずの外の世界とは実は同じ構造だったのだ。この時点で古倉は、そのどちらにもマニュアルがあり、それに適わない人間は迫害、敬遠される構造があるのだと感じる。それを回避するには、コンビニでは「制服を着てマニュアル通りに振る舞う」(p.87) べきで、世界においては「普通の人間という皮をかぶってそのマニュアル通りに振る舞う」(p.87) べきだという。「振る舞う」という言葉を使うのは、飽くまで古倉はマニュアル、つまり世の定型に迎合、同化するつもりはなく、迫害を避けるためにただ演じることを受け入れようとしている。

しかしこれは確信にかわる。その日古倉は白羽を家に連れて帰り、家に男性がいると妹に電話で伝えることを試みる。その興奮した反応をみて、「現代社会の皮を被っていても、今は縄文だというのも、あながち的外れではないような気がしてきた」(p.92) と思う。「もうとっくにマニュアルはあったんだ」「「普通の人間」というものの定型は、縄文時代から変わらずずっとあったのだと、今更私は思った」(p.92) と気づきの遅さを嘆く。「さっさと指示をだしてくれれば遠回りせずに済んだのに」(p.92) という「遠回り」とは、コンビニでの自身の「正常化」のための努力と、長い年月への疑問であろう。18 年間アルバイトを続け、「正常化」できる場所だと信じていたコンビニに対する疑問は、すなわちゆるぎない信仰が壊れることをも意味するだろう。こうした確信の揺らぎは、白羽の主張を聞き、同居を始めることなくしては、ありえなかったことである。

妹の次に、ミホの家に集まったときには自分から白羽のことを「さりげなく口にし」(p.104)、友人らの反応をみる。そこで「頭がおかしくなったのだろうかと思うほど」「狂喜乱舞」(p.104) している友人たちを見て、やはり白羽の理屈の正しさを身をもって知るのである。友人たちは、「本当の「仲間」になったと言わんばかり」(p.105) で、これまで自分は「あちら側」にいたが、「こちら側へようこそ、と皆が自分を歓迎している」(p.106) ように感じるのである。

ここではコンビニの世界と外の世界ではなく、「こちら側」と「あちら側」という新しい区分が古倉に認識される。コンビニでも同様で、「仕事熱心なところが尊敬できて、最高の同志だと思っていた」(p.117) 店長も、二人の同居

の話で泉さんと盛り上がり、仕事を忘れるほど熱中する。それを見て、「店長の中で、私がコンビニ店員である以前に、人間の「メス」になってしまったという感覚」(p.117) がするのである。コンビニにはコンビニのマニュアルがあり、それに従うことに徹していた古倉であるが、その基礎にあるのは、やはり縄文時代から変わらない男女の役割であった。さらには飲み会に誘われ、そこで初めて時々店員の間で飲み会があり、招かれていなかったことが明らかになる。古倉は仕事仲間ではあれど、業務を離れた時間に交流したい相手ではなかったのだ。確かに、これまで店員たちと古倉は業務に関する話しかしていなかった。プライベートに関する話題がなかったためだ。以前の古倉は他の店員と違って、仕事上の付き合いにのみとどめたい相手であったことが分かる。その古倉が、白羽との同居を始めたことで、共通の話題が生まれ、彼らの仲間入りをすることになったのだ。コンビニの外でも、コンビニにおいても、一つの真理があり、それらは別個の世界ではなかったのである。コンビニは外から隔離された「正常化」できる場所であるという古倉の認識は崩壊する。信じていたはずのコンビニも、外の世界と何ら変わりなく、さらには縄文時代から変わることのないマニュアルの下動いていたのだ。

これまで、古倉はコンビニのマニュアルを外の世界に持ちこんでいた。アルバイト初日に社員から評価され、「今まで、誰も私に「これが普通の表情で、声の出し方だよ」と教えてくれたことはなかった」(p.16) とコンビニのマニュアルこそが正しいと信じた。しかし、妹から「コンビニを始めてからますますおかしかったよ。喋り方も、家でもコンビニみたいに声を張り上げたりするし、表情も変だよ」(p.122) と指摘されてしまう。従うべきはコンビニのマニュアルではなく、外の世界で暗黙の了解として通用している定型こそが、真理だったのである。コンビニの世界で「安堵」し、「世界の部品」「世界の歯車」となり安心していたはずの古倉は、自分が属すことが出来る世界を失ってしまう。こうした認識の変化は、白羽との出会い、同居によってもたらされたものであるのに他ならない。白羽の存在は、その主張によってコンビニという救いの場所に疑問を抱かせただけではなく、コンビニでの仕事そのものの認識にも変化を与える。

> 白羽さんを飼い始め、コンビニでの私はさらに順調だった。ただ、白羽さんの分の食費がかかる。今まで休んでいた金曜と日曜もこれからはシフトを入れてもらおうかと考えると、ますます身体がよく動いた。(p.106)

とあるように、これまで自分の「正常化」のために働いていた古倉が、他人を養うために働くことになっている。しかし飽くまで白羽は同棲する恋人ではなく、「飼」うものである。恋愛感情や友情などはそこになく、世間を納得させるため、つまりは自分が「治」ったのだと外の世界の人々に見せるための道具としての存在が白羽なのである。「正常化」される場所として信仰していたはずのコンビニは、金銭を稼ぐための場所として変化した。

店員同士の飲み会の存在さえ知らされない古倉はやはり「異物」なのである。結婚も就職もせずアルバイトを続け、そのことに別段焦りも感じない古倉はやはり「異物」である。家族から「どうすれば『治る』のかしらね」と言われている古倉は、完全に異物である。妹は白羽と暮らし始めたことを心から喜んでいたが、実態は風呂場に住まわせ、周りを喜ばすために「家の中に入れておくと便利」(p.121) という理由から家に置いているのだと知ると、「もう限界」「どうすれば普通になるの？」(p.123) と尋ね、一緒にカウンセリングに行くことを勧める。妹という立場から古倉を気遣ってはいたものの、古倉を異物として捉え、治ることを期待していたに過ぎない。古倉は白羽を通して、やっとそれを知るのである。

> 皆が不思議がる部分を、自分の人生から消去していく。それが治るということなのかもしれない。(p.88)

これまで、自身を「正常化」してくれる唯一の場所であったコンビニが、古倉の頭にはなくなっている。なぜ未だアルバイトなのかより、「何で結婚しないの？」と言われた回数のほうが多かったと知った古倉は、自分自身の信仰するコンビニより、コンビニの世界より、外の世界の人々が口にする疑問に応えることがすなわち「治る」ことなのだと認識を改めている。

> 私は、白羽さんの存在が自分にとって有益かどうか考えていた。母も妹も、そして私も、治らない私に疲れはじめていた。変化が訪れるなら、悪くても良くても今よりましなような気がした。(p.101)

古倉は気づいた。コンビニに「正常化」を求めるのではなく、世のマニュアルに迎合し、従って生きることこそが真の正常化ではないのかと。古倉はここで白羽の主張を受け入れたのである。18年間のコンビニアルバイトは、白羽の登場によって終わりを迎えることになる。

4、コンビニの「音」と「声」

4．1 白羽登場前のコンビニの「音」

コンビニを「正常化」してくれる場所であると信じ、コンビニに依存、さらには信仰までしていた古倉は、白羽との出会い、同居、そしてそれをめぐる周囲の人々の反応によって徐々にコンビニという場所についての認識を改めていき、ついにはアルバイトを辞める。白羽の掲げる主張、つまり縄文時代から変わることのない男と女の役割といった世間の定型の妥当性を身を持って体験することで、コンビニと外の世界は異なった別個の世界ではないことを理解する。

外の世界もコンビニの世界も変わらないといった古倉の認識の変化は、常に古倉に聞えるコンビニの「音」にも明確に現れる。古倉にとって、コンビニは「音」に満ちた場所である。コンビニの立てる「音」は時にざわめき、時に音楽となって、勤務以外の時間にも古倉の耳に響いている。当該小説の冒頭部分も、コンビニの「音」についての描写から始まる。

> コンビニエンスストアは、音で満ちている。客が入ってくるチャイムの音に、店内を流れる有線放送で新商品を宣伝するアイドルの声。店員の掛け声に、バーコードをスキャンする音。かごに物を入れる音、パンの袋が握られる音に、店内を歩き回るヒールの音、全てが混ざり合い、「コンビニの音」になって、私の鼓膜にずっと触れている。(p.3)

「アイドルの声」「店員の掛け声」は「音」ではなく「声」であるが、これらは包括され「コンビニの音」として古倉に届いている。つまりは空間を満たす単なる音波であり、そこにメッセージ性はない。また客の立てる音は合図として、客の行動を古倉に予測させ、間接的に指示を与えるものである。

> 眠れない夜は、今も蠢いているあの透き通ったガラスの箱のことを思う。清潔な水槽の中で、機械仕掛けのように、今もお店は動いている。その光景を思い浮かべていると、店内の音が鼓膜の内側に蘇ってきて、安心して眠りにつくことができる。(p.22)

コンビニの音は古倉に指示を与え、行動させるものでもあるほか、このように安心感をも与えるものである。古倉がコンビニについて思いをめぐらせるときは、いつでも、その音とともにコンビニの様子が頭に浮かぶ。コンビニという世界と、その音とは不可分なのである。寧ろ、店内に客と店員がおり、音で賑わっている様子こそが、古倉にとってあるべきコンビニの姿とし

て、安心感を与えるものであるととれる。眠れない夜同様、コンビニの外の世界でうまくいかない時にも、古倉はコンビニの「音」を求める。ミホの家でのバーベキューで、古倉は「異物になっている」と感じ、「正常な世界」における「削除」や「処理」といった言葉が頭をよぎった時も、自身の存在への不安からその後非番にも拘らずコンビニに向かうが、その理由とは「なんとなくコンビニの音が聴きたく」(p.77) なったためである。

コンビニの「音」の中でも、とりわけ神聖視し「教会の鐘の音」と見立てているのが入り口の「チャイムの音」であることは一章で確認した通りである。チャイムの音は客の来店を知らせる音であるとともに、新しい接客がその時点から始まることを意味する。コンビニは客なくしては経営ができず、古倉は「店員」になることもできない。自分を店員としてくれる客の到来を知らせる合図、それが「チャイムの音」である。

このように、コンビニへの思いはその音と不可分であるが、「音」に満ちたコンビニとは、コンビニという場所が活動している様子そのものである。コンビニが回転している様子、客で賑わっている様子、そのような状態が古倉を安心させるのだ。客の到来、客による賑わいはすなわちコンビニの充足、安泰を意味する。安泰である限り、古倉の大切な居場所は守られるのである。

4．2 白羽同居後のコンビニの「音」

古倉の鼓膜に響いているコンビニの「音」は、白羽との同居によって少しずつ変化して行く。眠れない夜、友人らとの交流において居心地の悪さを感じた際など、自由にコンビニの音を思い浮かべることができた古倉であったが、元コンビニ店員の白羽と世間を納得させるために同居を始めたあと、古倉の耳にのみ響く「音」と、実際のコンビニにおける「音」の双方に変化が現れる。

白羽が家に来た初日は、「時折、ごそり、ごそり、という白羽さんのたてる音が聞こえてきたが、だんだんと頭の中にあるコンビニの音のほうが強くなり、いつのまにか眠りの中に吸い込まれていった」(p.96) とあるように、実際にすぐ近くで立てられる音よりも記憶の中の「コンビニの音」のほうが優勢である。

> 自分が咀嚼する音がやけに大きく聞こえた。さっきまで、コンビニの「音」の中にいたからかもしれない。目を閉じて店を思い浮かべると、コンビニ

> の音が鼓膜の内側に蘇ってきた。
> それは音楽のように、私の中を流れていた。(p.116)

強く古倉の耳に響くコンビニの「音」は、単なる音から「音楽」となり、それは「流れる」と表現される。店内のざわめきは「音楽」というさらに心地よいものとして、古倉の耳で鳴るのである。この時点では目を閉じればコンビニの音を思い浮かべることはできるが、その直前、自分の咀嚼の音が「やけに大きく」聞こえている。ここは、同居後一緒に夕食を取っていた白羽が、風呂場で食事することを求めたため、久しぶりに一人で食事することになった場面である。形だけの同居ではあれど、家に誰かがいる生活を経験し、食事も共にしていた。一人暮らしには慣れていたはずの古倉であるが、久しぶりに一人で食事となると、孤独感が音を通して実感される。コンビニの「音」は「音楽」となり、古倉を励ます。そして古倉は「明日、また働くために、目の前の餌を身体に詰め込」(p.116) み、コンビニに意識を向かわせるのである。

しかしこの「音楽」は、コンビニ店員たちによって不快なものに変えられる。店員たちは白羽と古倉の同居を知り、業務よりそちらに気を取られるほど熱中してしまうのである。

> 店の「音」には雑音が混じるようになった。皆で同じ音楽を奏でていたのに、急に皆がバラバラの楽器をポケットから取り出して演奏を始めたような、不愉快な不協和音だった。(p.118)

ただの「音」から「音楽」となり、さらに心地よくなったはずのコンビニの音は、店員たちの団結が乱れたことで「不協和音」となる。確かにそれは「音楽」であるが、心地の良いものとはいえない。そしてついに、コンビニの音は古倉の耳から消える。

> きゅっと蛇口をひねると、久しぶりに耳が静寂を聴いた。
> 今まで耳の中で、コンビニが鳴っていたのだ。けれど、その音が今はしなかった。久しぶりの静寂が、聞いたことのない音楽のように感じられて、浴室に立ち尽くしていると、その静けさを引っ掻くように、みしりと、白羽さんの重みが床を鳴らす音が響いた。(p.131)

この引用部分では、白羽の立てる音が、常に耳に響いていたコンビニの「音」についに勝っている。心地の悪い音は、聞くに値しない。つまり、居心

地のよくない世界は、所属するに値しないのである。もはやコンビニは古倉にとって、「正常化」が期待できる場所ではない。そしてその二週間後、

> 部屋の中には白羽さんの声や冷蔵庫の音、様々な音が浮かんでいるのに、私の耳は静寂しか聴いていなかった。私を満たしていたコンビニの音が、身体から消えていた。私は世界から切断されていた。(p.135)

コンビニを辞めた古倉はコンビニの「音」を思い出すことができない。コンビニとのつながりを失った古倉は、世界そのものとも引き離される。音を忘れることはコンビニでの仕事の日々を忘れること、客の立てる「音」から情報を拾って行動していた古倉にとって、身に染み込んだ仕事の感覚をも忘れることであった。境界も不明瞭になったコンビニとその外との狭間で、既にコンビニ店員でもなく、白羽とも形だけの同居という状況では、世の定型である男と女の役割も十分に果たせていない。古倉はいかなる世界とも、繋がりを持たなくなってしまったのである。

4．3 コンビニの「音」から「声」へ

古倉の耳に響くコンビニの「音」は音楽へ、そして不協和音へと変化していったが、その音も仕事を辞めることが決まった日に消えてしまう。コンビニにいなくとも古倉の耳に聞こえるその音は、古倉に安心感を与え、実生活でなにか居心地の悪さを感じるとその音が恋しくなり、実際に聞きに行くものであった。コンビニと自身を繋ぐ「音」が消えることは、古倉にとって「世界から切断され」ることであり、自分の属する世界を失った古倉はその日眠ることができず、その後一ヶ月近くも寝て、起きて、食べるだけの生活が続く。

そして白羽の見つけた新しい派遣業の面接の日、白羽について偶然入ったコンビニでついに、コンビニの「音」ではなく「声」を聞く。これまで、飽くまで「音」であるそれは、ただ響いているだけのものであり、メッセージ性を持つものではなかった。しかし、その日、古倉が聞いたのは意味を持った「声」であった。

> そのとき、私にコンビニの「声」が流れ込んできた。
> コンビニの中の音の全てが、意味を持って震えていた。その振動が、私の細胞へ直接語りかけ、音楽のように響いているのだった。(p.145)

「声」は確かに「コンビニの中の音」であるが、「意味を持」ち、「語りかけ」るものであった。「声」は音と違い、メッセージ性を持つ。そのメッセージとは、コンビニからの、「コンビニが何を求めているか、どうなりたがっているか」(p.147) であった。古倉はその「声」を「コンビニからの天啓」と呼ぶ。この日、偶然入ったコンビニにおいて、古倉は店員ではなく単に客である。客であればそのメッセージに応える必要はない。しかし、かつて信仰していたコンビニからの「天啓」をただ聞き過ごすことはしない。「天啓」により店員たちに的確に指示を与え、不足点を指摘し、ただの注意とならないようフォローすることも忘れない。古倉は「天啓」だと信じているが、祈りが通じた形ではなく、古倉がコンビニにとって何が必要なのかを、これまでと違いマニュアルを超えて自身が“考えた”ものである。自主的に行動するということは幼少時代にやめたことで、長年他人の真似をし、指示に従ってきた古倉にとって、考え、それを実践するということがどういうことなのかうまく掴めない。そのため、思いがけず与えられた「天啓」としてしか捉えられない。

白羽と出会ったことでコンビニの世界とは、外の世界とは何かとその狭間で悩み、自身の従うべきマニュアルにも悩み、一時は認識を改めようとした古倉であったが、やはりコンビニの世界こそが自分の生きるべき世界だと思い、その思いは以前よりもさらに強くなっている。しかし、これまでのように与えられたマニュアルにのみ従い、勤続年数が長いにも拘わらずアルバイトリーダーにもなれずにいた古倉とは違う。「コンビニからの天啓」を受け、コンビニが自分にとっていかに大切か気づいた古倉は、店員たちを指導できる術を身につけたのである。

このように、コンビニの「音」への希求はすなわち、古倉のコンビニへの依存度を反映しており、依存の強さによって、「音」は「音楽」となり、古倉の中を流れた。アルバイトを始めることで、古倉は「コンビニ」を通して世界とつながり、コンビニの充足状態を表す店内のざわめきこそが自身を安心させ、励ますものであったが、白羽との出会いによって、コンビニへの信仰だけでなく、「世界」の定義、「マニュアル」の定義、さらには「正常化」の定義までもが崩れてしまう。それを如実に示すのが、白羽の立てる音がコンビニの「音」に勝るということであった。コンビニの音が消えていく過程は、白羽の主張、つまりは世の定型、さらにいうなら世間の男と女のあり方を受

け入れる過程と平行し、さらにそれが「声」に変化し、古倉がそれに応じる様子は、一旦は受け入れた世間の男と女のあり方に迎合することを否定することをも示している。

5、おわりに

幼少期から「少し奇妙がられる子供」で、周囲との交流を避け、自身の狭い世界で生きてきた古倉であったが、コンビニでのアルバイトを始めたことで「コンビニ店員として生まれ」、「世界の部品」、さらには「世界の歯車」となった。「上手に「人間」ができ」る場所として、安堵できる場所としてコンビニに依存するが、それはコンビニにマニュアルがあるからで、マニュアルの外でのあり方には依然悩んだままである。コンビニにはマニュアルがあり、外の世界にはマニュアルがないため、生きづらさを感じていたのだ。

しかしコンビニ店員白羽との出会い、同居を経て、白羽の主張する理屈の妥当性を外の世界とコンビニの世界の双方で実感する中で、どちらにもマニュアルがあることを知り、さらにそれは同じものだったと知る。そして18年間コンビニの「正常化」作用を信じて働いていた自分は「遠回り」していたのだと痛感するのである。アルバイトを辞め、約一ヶ月近くコンビニから離れた生活をしていた間、何のために眠るのか、食べるのかすら分からない生活の中で、古倉は一旦依存状態から抜け出す。そして面接の日、偶然入ったコンビニの「声」を聞いた古倉は、店員たちを評価し、励まし、指示を与えることができるほどになる。そして古倉は、自分が「コンビニ店員」であると確信する。

> 「（略）人間の私には、ひょっとしたら白羽さんがいたほうが都合がよくて、家族や友人も安心して、納得するかもしれない。でもコンビニ店員という動物である私にとっては、あなたはまったく必要ないんです」（p.150）

古倉は「コンビニ店員という動物」であり、この「動物」は「人間」と対に置かれる。動物と表現することには、「私はコンビニ店員という動物なんです。その本能を裏切ることができません」（p.150）と、「本能」によって行動することによる。対して、「人間」とは縄文時代から変わることのない世間のマニュアルに従う存在であり、世間の望む男と女のあり方に迎合する存在である。二つを比較すれば、本能に従って突き進む「動物」のほうが、より自

由であることに違いない。世界の根底にあるマニュアルには従いたくない、従えない、それが新しい古倉であった。一度極限まで悩み、依存状態から脱した古倉の決意は固い。ここで、古倉は面接先に断りを入れようとし、さらに「新しい店を探さなくてはいけない」(p.151)と思うのである。

これまで古倉にとって、コンビニといっても、それは自身の勤務する「スマイルマート日色町駅前店」だけであった。世界と繋がることができたといっても、やはりそこは限られた狭い世界でしかない。新しい店を探すということはつまり、「スマイルマート日色町駅前店」の店員ではなく、より普遍的なコンビニ店員として生まれ変わることを意味する。それはすなわち、古倉が世界ではなく、「社会」に身を置く第一歩となりえるだろう。

コンビニを出たあと古倉は、

> 私はふと、さっき出てきたコンビニの窓ガラスに映る自分の姿を眺めた。この手も足も、コンビニのために存在していると思うと、ガラスの中の自分が、初めて意味のある生き物に思えた。(p.151)

アルバイトを始めたとき、古倉は「コンビニ店員として生まれ」たと感じた。また、自身の店員としての有りようを「世界の部品」「世界の歯車」と喩えたが、ここでは「初めて意味のある生き物」として再生することになるのである。無機質なものとは違い、血の通う生き物となったのである。姿かたちは「人間」として存在しているが、コンビニでしか生きられない「コンビニ人間」が誕生したのである。

著者村田沙耶香は第31回野間文芸新人賞受賞作『ギンイロノウタ』出版時のインタビューにおいて「私は人間は憎んでいませんが、世の中のシステムとか慣例とか空気を読まなければならない空気とか、そういうのはすごく嫌で、そこからみんなを引きずり出したいという願望は強くある[3]」と述べている。「世の中のシステム」「慣例」とは、まさに世間の「マニュアル」である。当該「コンビニ人間」には「みんなを引きずり出したい」といった強い力は感じない。実際、芥川賞受賞会見においても、「人間をもっとユーモラスに、もっといつくしむようなまなざしで書きたいと。読んでユーモアを感じる小説を書きたかった。今回、初めて実戦できたのかもしれない[4]」と述べている。確かに、一度は世間を納得させるマニュアルを知り、形だけではあれど実践し、妹や友人たちの喜ぶ姿を目の当たりにし、これが正しいと実感しな

がらも、再びコンビニに人生を捧げようとする姿は滑稽でもある。しかし、そうした人間を「いつくしむよう」に描けたのも、著者にとってコンビニが「ずっと働いてきた場所に対する自分の愛情[5]」を反映しているからであろう。

＊本文の引用は文藝春秋刊『コンビニ人間』2016年7月による。

注・引用文献

[1]「コンビニ人間」が50万部「アメトーーク！」で推薦．産経ニュース2016年11月14日付．
http://www.sankei.com/life/news/161114/lif1611140033-n1.html（本稿で参考にしたWEBページの最終アクセス日はすべて2016年11月20日である）．

[2]『文藝春秋』2016年9月特別号最終ページ・編集だより．

[3] 吉田伸子．家族小説に大きな一石を投じた物語．
http://www.shinchosha.co.jp/shinkan/nami/shoseki/310072.html.

[4]「コンビニ人間」で受賞した村田沙耶香さん「コンビニへの愛情を形にできた」．産経ニュース2016年7月20日付．記事中の「実戦」は原文ママ．
http://www.sankei.com/life/news/160719/lif1607190016-n1.html.

[5] 注4に同じ．